

定例法座 法話 (午後1時から) ○10月27日(日)：大町慶華輪番 ○10月28日(月)：谷口昭久氏「舊廟寺」 ○11月11日(月)：大町慶華輪番 ○11月13日(水)：大植明氏「橋谷寺」

ひだご坊 報恩講

報恩講は、宗祖親鸞聖人が出遇われた念仏の教えに、私たちが遇えたことを喜び、その恩徳に報謝する真宗門徒にとって大切な御仏事です。

11月 1日 (金)	午後1時30分	初逮夜 音楽法要 講師 太田 浩史 氏
	午後7時	ご坊報恩講の夕べ 悔悟の記録
2日 (土)	午前7時	辰朝(お朝事) 法話 三島 多聞 氏
	午前10時	東本願寺創建 教如上人 ゆるゆる忌法要 講師 太田 浩史 氏
	午後1時30分	大逮夜 講師 太田 浩史 氏
3日 (日)	午後6時	御伝鈔拝読 第32回 別院真宗公開講座 講師 黒田 進 氏
	午前7時	辰朝(お朝事) 法話 大町慶華輪番
	午前9時	帰敬式
	午前10時	報徳会 再建永代経 全飛門徒会 物故者追弔会 講師 黒田 進 氏
	午後1時30分	満中 講師 黒田 進 氏

ご坊報恩講の夕べ
劇団なんじゃもんじゃ ひとり芝居

「悔悟の記録」

～ある憲兵がもの語る本当の戦争～

戦時中、中国に出征し、憲兵として多くの中国人を殺害、拷問した加害体験を持つ土屋芳雄さん(故人)の体験記録。戦争によって虫も殺さぬ純朴な青年が、軍服を着た殺人鬼になっていったすがたが描かれます。元兵士の悔悟の声から、戦争の愚かさ、平和の大切さを改めて考えます。

11月1日(金)夜7時開演

会場 高山別院 庫裡ホール

入場料 大人500円 中学生以下無料
(前売り券は別院にあります)



参拝送迎バス

11月2日・3日には別院報恩講参拝送迎バスを運行します。お問い合わせ、お申し込みはお手次のお寺まで。

【2日】白川村、荏刈町、久々野町、一之宮町、下呂市、国府町、飛騨市

【3日】丹生川町、朝日町、高根町、清見町、山田町、下林町

お斎 庫裡ホール

期 日 11月2日(土)・3日(日)昼

お斎料 1,500円

ご坊名物大根汁(無料)

期 日 11月1日(金)～3日(日)

フリーマーケット

期 日 11月1日(金)～3日(日)

抹茶接待(無料) 庫裡御殿

日 時 11月1日(金)
午前11時～午後3時

主 催 二木社中

飛騨と教如上人展(入場無料)

別院寺宝館

日 時 11月29日(金)まで
午前10時～午後3時

玉翠会書道展 庫裡ホール

期 日 10月26日(土)・27日(日)
午前9時～

子ども報恩講

日時 11月9日(土)
午前10時～午後3時頃

※昼食はごちやうで用意いたします。

内 容 おつとめ、作品展表彰式、人形劇、おはなし、遊びの広場など

持ち物 お念珠、お勤めの本

参加費 無料



子ども作品展

書道や絵画の作品を展示します。

期間 10月26日(土)～11月9日(土)

会場 高山別院 本堂



大谷婦人会 高山支部報恩講

日時 11月11日(月)
午後1時から

会場 高山別院 本堂

講師 大町慶華輪番

※午後12時よりお斎があります。(1,000円)

ご回壇案内

11月
10日(日) 淨願寺(丹生川町)
13日(水) 了泉寺(鉄砲町)
井上円先生の一恵信尼消息から見える親鸞像は今月はお休みします。なお、連載は来月分が最終回となります。

☎テレホン法話(0577)(34) 2313 ☎10月21日〜31日: 光本智見氏「南無寺」 ☎11月1日〜10日: 櫻居和雅氏「西光寺」

「わしら、ひどいめにしておてコメ作ってきたわいの。田んぼに薄氷の張つところから、牛や馬の背を迫り立てて田を起すや。……畦かいたると三三の刃に蛙が刺さる。思わず、ナンマンダブ、堪忍してくれや。蛙も潰さんならんし、虫も捕らんならん。それらの命のお陰で、このコメ粒いただくがや」

(「北国新聞」一九九七年五月二日)

ある真宗の坊さんが、北国門徒のお百姓の思いを記した文章です。やはり北陸の山村で念仏しながら鎌を振るう老人を見た学者の文が重なってきます。

「彼が念仏しているのは、耕すことを通じて仏とつながっているのだ。鎌の一振り一振りが彼にとっての仏道であり、この世で生きることの意味を紡ぎ出す。彼にとつて大地は自らの役割を果たす場所(トボス)なんだということですね。だから彼にとつて、土壌が汚染されて自らの役割を奪われるというのは、やはり存在が奪われることとなるわけだ」

(中島岳志、「同朋新聞」二〇一一年九月号)

お念仏とともに鎌を振るい、生きる意味が紡ぎだされています。この度の大震災と原発事故の汚染でそのトボスが失われたのではないのでしょうか。現代という時代の業(わざ)です。飛騨は名だたる真宗地帯。道場が要になって村

う一方では道場で僧の役を勤めるといふ、兵農僧俗一体が村のあり方でした。そこに生きる意味を紡ぎだす場として、仏法領がありました。

織田信長や豊臣秀吉は、仏法領を百姓と侍と僧に分解しようとした。これに抵抗したのが一向一揆でした。その精神を受け継がれたのが教如上人です。上人が開かれた東本願寺は、生きる意味を紡ぎだす場、仏法領として構想されました。信長に抵抗して、飛騨や美濃の山間を秘かに巡回された上人に、門徒衆は「蛙や虫を殺して生きる私、村どうしが武器を取って争い、仏法領を守るために修羅の如くにならねばならなかった私」が、お念仏だけで救われるの(だろうか)と問いかけました。「狼、すなわちをせよ、かかるあさましき罪業にのみ、朝夕まどいぬるわれら」を必ず救いたまう本願と、蓮如上人の「御文」が読まれたことでした。いし、かわら、つぶてのごとくなるわれら」も、撰取の光明におさめられるという親鸞聖人の御言葉(唯信鈔文意)も語られたことでしょう。

教如上人は、親鸞聖人や蓮如上人が掲げられた「帰命尽十方無碍光如来」という十字名号に着

目され、その両脇に尽十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ一念歡喜するひとを必ず滅度(めつだ)にいたらしむ(十方に放たれた如来の光明が遮られることなく私たちが照らし出し包み込み、必ず往生と定められるという御和讃を書き添えた掛軸を門徒衆に授けられました。また、「南無不可思議光如来」の九字名号も書かれました。御和讃の書き添えがないものも含めて、全国で三十九点発見され、高山にも数点が伝えられています。生きる意味を紡ぎだす仏法領が教如上人の願いでした。今度は私たちがその再興を担わねばなりません。

教如上人記念法要を勤修



東本願寺を創立した教如上人の記念法要が、上人の四百回忌の祥月命日にあたる10月5日に、別院で勤修されました。

当日は、約100名の方にご参詣をいただき、大桑齊氏(大谷大学名誉教授)から「本願寺別立の理念—教如上人、飛騨からの出発—」を講題に記念講演をいただきました。

なお、別院報恩講中の11月2日に、あらためて「教如上人四百回忌法要」が勤修されます。

特別展「飛騨と教如上人展」開催

— 別院寺宝館において開催中 —

開 期: 11月29日(金)まで
開館時間: 午前10時〜午後3時



教如上人四百回忌を記念して、寺宝館において特別展「飛騨と教如上人展」を開催中。

教如上人授与の名号や「御文」、飛騨門徒に大坂への動員を呼び掛けた顕如上人の書状、教如上人が、金森長近に家康への取り次ぎ

を依頼した書状などのほか、教如上人をとりまく信長・家康・秀吉、長近や千利休の映像も展示。初めて公開される史料も多い。

また、図録『飛騨と教如上人』とDVDも販売中。

図録『飛騨と教如上人』 3,000円

DVD『飛騨と教如上人』 1,500円

お問い合わせは高山別院(TEL0577-32-0688)まで



念じられ 照らされて

生きる意味を紡ぎだす

— 仏法領と教如上人 —

大桑 齊



(略歴)
一九三七年生まれ。大谷大学名誉教授。金沢教区善福寺前住職。著書「教如 東本願寺への道」「戦国思想史と蓮如」他

中にお念仏がひびき渡っていた。道場に集っての朝のお勤めから一日が始まり、お念仏と共に鎌を振るい、夜談義に御恩報謝が語られました。人びとの生活が仏さまに包み込まれている、こうしたあり方を仏法領と呼びます。お念仏の生活が、生きる意味を紡ぎだしていった。

しかし、近代化と呼ばれる、貨幣が魔力を振るう時代の深まりとともに、お念仏が伝わってから何百年間、ついにこの間まで続いてきた仏法領が失なわれたのではないのでしょうか。

仏法領は戦国時代に最も栄えました。百姓であると同時に、一方では武器を持つ侍であり、も

目され、その両脇に尽十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ一念歡喜するひとを必ず滅度(めつだ)にいたらしむ(十方に放たれた如来の光明が遮られることなく私たちが照らし出し包み込み、必ず往生と定められるという御和讃を書き添えた掛軸を門徒衆に授けられました。また、「南無不可思議光如来」の九字名号も書かれました。御和讃の書き添えがないものも含めて、全国で三十九点発見され、高山にも数点が伝えられています。生きる意味を紡ぎだす仏法領が教如上人の願いでした。今度は私たちがその再興を担わねばなりません。

任職の言葉

称名念仏 報恩感謝
莊川組 浄念寺 照元 興圓

蓮如上人は「御文」さまに罪惡深重の私どもに「かくのごとく決定してのうえには、ねてもさめても、いのちのあらんかぎり、称名念仏すべきものなり」とお教えくださっております。

父(前任住職)は二〇一一年十一月二十五日の誕生日(九十歳)を迎える二週間前に亡くなりました。

私たちが家族は、その年の四月から父の自宅介護をさせていただきました。(母は病院で七年前に亡くなりました)

当初は自宅介護を心配しておりましたが、介護は妻が主で、私の力の及ぶところではありませんでした。

六ヶ月ほど過ぎたある日、いつものように昼の食事の世話をしていると、

父は日頃から朝な夕な、特に食事の前後は必ず念仏を申されておりました。臨終に際しても声には聞こえませんでした。念仏に支えられ、お浄土へお還りになりました。

念仏が血となり肉となり、また、阿弥陀様の本願に励まされ生かされた父の生涯から、称名念仏を教えていただいたことです。

ナンマンダブ ナンマンダブ 合掌

私の目を見ながら「すまん、ありがとう、ナンマンダブ」と弱々しい声で申されました。予期せぬ言葉に私は一瞬、言葉も出ませんでした。

それから二ヶ月後の夜、父の容体が急変し、医師・看護師さんの手篤い手当の甲斐もなく家族の見守る内、父は大きな目を見開いて迎刃を見廻し、声にはなりませんでした。唇を「ナムアミダブ」と動かすようにしながら静かに静かに目を閉じ、臨終を迎えられました。

父は日頃から朝な夕な、特に食事の前後は必ず念仏を申されておりました。臨終に際しても声には聞こえませんでした。念仏に支えられ、お浄土へお還りになりました。

念仏が血となり肉となり、また、阿弥陀様の本願に励まされ生かされた父の生涯から、称名念仏を教えていただいたことです。

ナンマンダブ ナンマンダブ 合掌